

書道研究誌

書の光



6

2024

Vol.670
宮城野書道会



漢詩を味わう

第179回

山中流泉 さんちゅうのりゅうせん

儲光義 ちよこうぎ

山中有流水 山中に 流水有り

借問不知名 借問すれども 名を知らず

映地爲天色 地に映えて 天色を為し

飛空作雨聲 空に飛んで 雨聲を作す

轉來深澗滿 転じ来たつて 深澗に満ち

分出小池平 分かれ出でて 小池平らかなり

恬澹無人見 恬澹として 人の見る無く

年年長自清 年年 長に自ら清し

山中に流れる水

その名を尋ねてみたが誰も知らない

地面に照り映えて青空の如く澄んだその色
空中に飛び散つて、雨のような音をたてる

流れめぐつて奥深い谷間に満ちあふれ
分かれ流れて小さな池に平らかに満ちる

やすらかに見る人もないままに

年ごとにいつの日も他とは無関係に清らかに澄んでいる

《借問》かりそめに問う。ちよつと尋ねてみる。

《澗》谷川。

《恬澹》物に拘らず安らかなるさま。

《自》おのかじし、それ自体で、他とは無関係に。

作者の儲光義は盛唐の詩人です。二十歳で進士に合格し、四十七歳で官吏や地方行政を監視する監察御史になりましたが、安祿山の乱のとき賊軍に捕らえられ、一時安祿山の官位を受けたため、乱の平定後、嶺南（広東省）に左遷されています。

李白や杜甫と同様に安祿山の乱に人生を翻弄された儲光義は、好んで田園の生活や自然を題材に詩を詠んでいます。緑に映えた夏の谷川や幽谷の溪流は、自然へのあこがれと相俟つて画家や詩人たちの心をかきたてる題材です。

唐詩選集「三体詩」に掲載されている詩です。「三体詩」は南宋時代の周弼により編集された漢詩集で、唐代の七言絶句、七言律詩、五言律詩の三体に限つて収録し、それを表現のスタイルによって分類して掲載している珍しい詩集です。

この詩は「詠物」というジャンルに収録されています。「詠物」とは、今回の詩のように具象的な事物を取り上げて題詠することです。周弼は詠物詩の難しさを「意を寄せるところに従つて、感興をもよおすままに詩を作るのは容易いが、事物にびつたりと即して詩を作るのは卑俗になり易くて難しい。」と言っています。単に事物の描写に終始することは簡単ですが、その物に託して同時に何かを表現することが詠物詩の難しいところであると指摘しています。

三体詩は日本には南北朝時代に伝わり、五山の僧侶釈素隱の講義記録「素隱抄」が遺されています。これによると、「流泉を以つて己が智に喩え、山中を以つて己が世に用いられずして、隱居して年月を送るにたとえ……」。と本詩の解説をし、すなわち儲光義は山中の流水を自分の「智」に喩え、名前さえ知られず世に用いられないが、己の心は清らかに澄んでいる。と自分の境遇を山中の流水に喩えているとしています。

「上善若水」という言葉があります。理想的な生き方は何にでも形を変えて収まる水のようなことをいいます。儲光義は過ぎ去る時とともに絶え間なく変転してやむことのない世の中で、自らの理想を流泉に託したのかもしれない。

参考文献・中国古典選「三体詩」(朝日新聞社)

江水東流急に 風波正に未だ安からず 郎は今何れの処にか去る 妾は小長干に留まる

江水東流急に 風波正に未だ安からず 郎は今何れの処にか去る 妾は小長干に留まる

《大意》 東に流れる江の水は激しく、いまだに風波はおさまらない。あなたは今、どこにいるのでしょうか。私は小長干で帰りを待っています。(朱彝尊詩・小長干曲) ※小長干は金陵の村里の名。

晝陰静かなり

晝陰静 晝陰静

《大意》 夏の真昼に木陰の静かなさま。(韋應物詩句)

読み
山月
石壁に映ず
(山の月は岩壁に映ってこの世の浄土である)

山月
石壁に映

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について
 規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
 初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
 規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩

「藍田山の石門精舎」

(後半)

朝梵林未曙

朝梵 林 未だ曙けず

夜禪山更寂

夜禪 山 更に寂たり

道心及牧童

道心 牧童に及び

世事問樵客

世事 樵客に問ふ

暝宿長林下

暝に宿る 長林の下

焚香臥瑤席

香を焚きて 瑤席に臥す

澗芳襲人衣

澗芳 人衣を襲ひ

山月映石壁

山月 石壁に映ず

再尋畏迷誤

再び尋ぬるに迷誤を畏れたれば

明發更登歷

明發 更に登歴せん

笑謝桃源人

笑ひて謝す 桃源の人

花紅復來觀

花の紅なるとき 復た來りて觀はん

草書

行書

石壁

山月暎

石壁

山月暎

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隸書

迷誤

再尋畏

石壁

山月暎

再び尋ぬるとき迷誤を畏る

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支 部		順 位		氏 名	
<p>ひかりいづる葵の影をみてーかば</p>					
<p>年へにけるもうれーかりけり</p>					

選子内親王

和泉溪石先生書



佐藤象雲書

音

センキケンアツ
カイハクカンシヨウ

略解

施璣は天文を見る器機。懸幹は時計。日月は常に運行循環して天地間を照らす。

東 觀

(微臣書を) 東觀(に属し)

東 觀

■ 虞世南・孔子廟堂碑

(初唐・西暦六二九年頃) の臨書

(3)

象雲臨

「東觀」

楷書は元來隸書から生まれたもので、およそ隋時代までの楷書は扁平の形の楷書が多く見られます。随代時代の「甯贇碑(ねいけんひ)(六四九)は縦長で当時としては珍しいものです。初唐になって縦長の楷書が多くなり、そのなかでこの孔子廟堂碑や九成宮醴泉の出現によって楷書の新しいスタイルが確立しました。

孔子廟堂碑は篆意を含むやや円勢の筆意のため温雅な風趣があり、九成宮醴泉銘と好対照を見せています。起筆は押さえ過ぎず、送筆も急激な緩急や抑揚を避けて、運筆速度にも留意して穏やかな表現を心掛けます。

今月は「東觀」の二文字の臨書です。

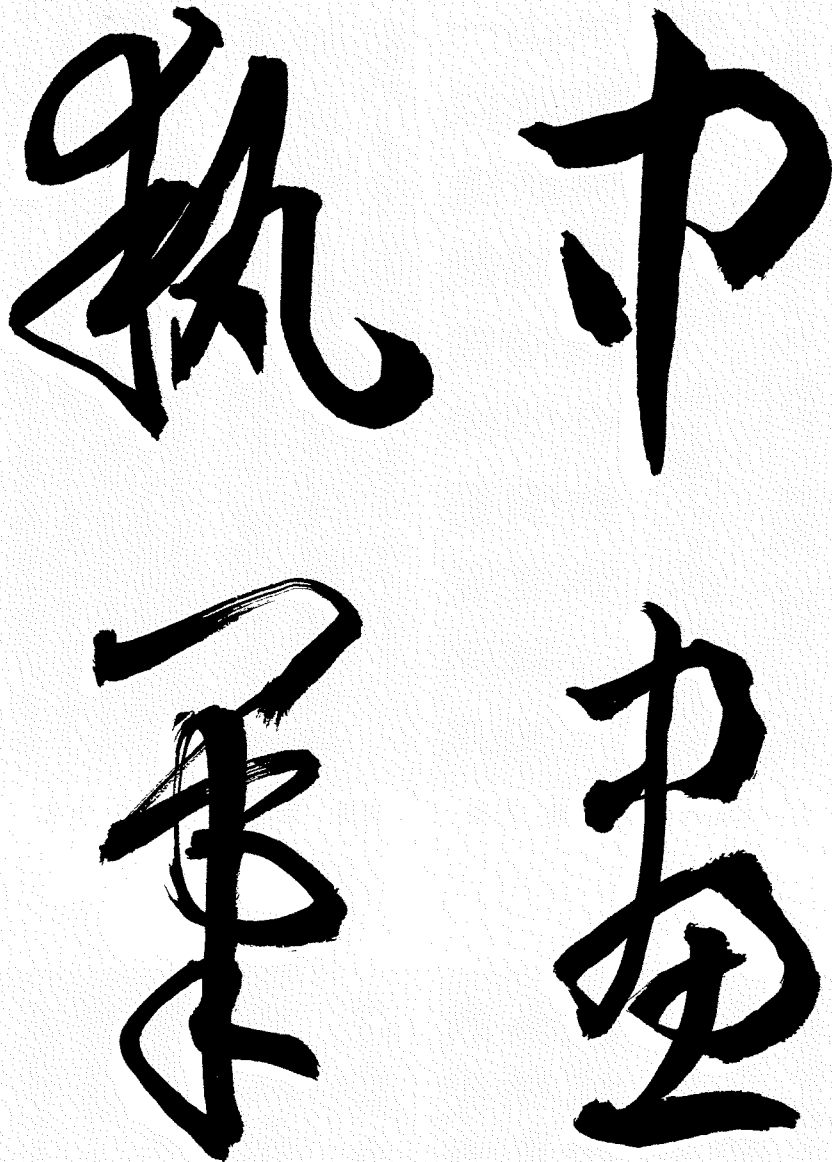
中書 執筆

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書

(59)

中に執筆の（二手）を画くも……

象雲臨



『中書執筆』

この一節は王羲之が幼いころに書を学んだといわれる衛夫人の書論『筆陣図』について述べている部分で、三通りの執筆法の図があるが、図は正確ではなく、また点画の説明もはつきりしない。子供の手引きぐらいの役にはなるだろう。と孫過庭は言います。そして『筆陣図』は王羲之の作かもしれないと述べています。

書譜は孫過庭の書論の草稿であることは度々述べていますが、面白いことに今回の四文字の次の行に「二手」と書くところが脱落して、あとで小さく書き添えてあります。「二手」と書いてあるようですが、原文は「三手」となっていて、筆陣図には実際に三通りの図が書いてあるからでしょうか。三の第一画が料紙裁断の折に欠落したのかもしれない。参考までに欠字した続きの部分を掲載します。

